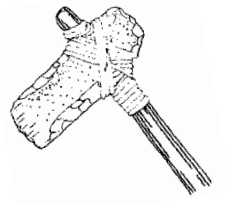




社会ってなんだろう・・・？



こんにちは。今年度から図書館でお世話になることになった川村と申します。よろしくお願いします。

この司書の部屋では「**社会に関する本**」を紹介していきます。社会科で習う範囲、例えば政治や経済、歴史や文化などについての本だと思ってもらえばいいと思います。

さて突然ですが、私たち人間と動物の最大の違いは何だと思いますか？手先が器用なところ？火や道具が使えるところ？それとも言葉を喋れるところ・・・？そういうことを述べた本はこれまでもたくさんあったように思いますが、『**サピエンス全史～文明の構造と人類の幸福～**』（上・下巻）**ユヴァル・ノア・ハラリ**著、**柴田裕之**訳 **河出書房新社 2016** は、これまでとは少し違った視点で人類の歴史について論じています。

まずはじめに、私たちホモ・サピエンスは唯一の人類ではないというところから話は始まります。アウストラロ・ピテクス、ホモ・ネアンデルターレンシス、ホモ・エレクトロス・・・などなど、かつて世界史の授業で聞いたことがあるような気がするなあという名前がたくさん登場しますが、約10万年前には、6種類の人類が地球上に存在していたそうです。そして、人類が私たちホモ・サピエンス1種類になったのは約1万年前のことで、これは人類の歴史全体から見ると、つい最近のことだそうです。

何種類も存在した人類のうち、なぜ私たちホモ・サピエンスだけが多数派となり、生き残ったのか？やはり他の人類よりも知能が高かったからでしょうか？筆者の見解は違います。まず知能が高いということであれば、もっと優秀な種類がいたそうです。例えば現在のヨーロッパなどに住んでいたネアンデルタール人は、ホモ・サピエンスよりも脳の容量が大きく、頑丈な体を持ち、火や道具を使う能力にも優れていたそうです。では、何が理由か？筆者によれば、ホモ・サピエンスだけが持つものとして「虚構（フィクション）を信じる能力」が挙げられるそうです。例えば、他の人類種や動物も「気をつけろ！ライオンだ！」と伝えることはできますが、「ライオンはわが部族の守護神だ」と考え、信じることができるのはホモ・サピエンスだけなのだそうです。虚構を大勢が信じることによって、他の人類種や動物では考えられないような大きな集団を形成し、みんなで協力することができるようになったのです。この構造は現在でも全く変わっておらず、国家や宗教、会社、学校などの虚構をみんなが信じ、見ず知らずの人どうしても協力できるからこそ、私たちはここまで大きな社会を作ることができたのだそうです。

虚構を信じる想像力が文明を作り、社会と呼ばれるものを発展させてきた。この考え方を知って「なるほど、そうかもしれないな」と感じました。食べる、寝る、外敵から身を護るといったことだけが生きるための「現実」だとすると、私たちの社会は、そのほとんどが想像力によって成り立っているような気がします。想像力を持っていることこそが「人間らしさ」であり、動物との最大の違いなのでしょう。

筆者は最後に、人工知能をはじめとする科学技術の急激な発展が、国家や宗教、資本主義などといったものを超える新しい形の虚構を生み出す原動力になるかもしれないと述べています。私たちは今、その変化の真ただ中にいるのかもしれない。